

賀正

# A HAPPY NEW YEAR

—— 火事と喧嘩は江戸の華 ——

江戸の頃火事場で活躍した町火消し達「いろは四十八組」は、その勇敢でいなせな姿で町人達の人気を集めました。

しかしまあ、いくらいなせで格好がいいとはいえ江戸の大火といえれば色々な話に語り伝えられる程の大火災。江戸の華だなんてまあ呑気なことだとは思いませんか？

木や紙で出来た家に住んで丸焼けになってほうり出された人達はどんなに情けない思いをしたことだろうと思うのですが、意外にそうでもなかったようです。

まず江戸庶民の中核をなしていた職人達は、腕さえよければ仕事に困るようなことは無かったし、まして大火ともなれば仕事も増えて景気がよくなるくらいで、職人ばかりでなく商家の手代にも当時は自由な労働市場が開かれていたようです。

肝心な米などの食料はどうだったかという点、江戸の倉は大火の度に守るべきものは守るといふ町人達の決意のもとに完全な耐火建築を完成させ、幕府の米倉には江戸の全町民が約半年間もなにもせず食べていけるだけのストックがありそれらの米はお救い米として、災害時に配給されるだけでなく常時でも病人などに配られていました。

つまり江戸には、自由な労働市場と、かなりの社会保障があったから『宵ごしの銭はもたない』というカッコイイくらしも出来たし、商家の手代から裏店の住人までが音曲を愛し、歌舞伎役者を品貝にすることも出来たのです。それに裏店はもともと自分の家ではないのだから火事に会えば四散してしまうのがむしろ当たり前でその自由さこそが彼らの身上であり、江戸っ子の気質を創りあげていました。

こうして江戸は、大火の度に生まれかわり以前にもまして繁栄し町をよみがえらせ新陳代謝し、成長し変化しながら次の新しさへの原動力を持ち続けました。

「火事と喧嘩は江戸の華」であり、江戸はつねに景気よく新鮮であり『いき』とはいきいきとしているという町であったようだ。



Milk Hall Times 31st

## Information

CONCERT

モーツァルトは、最も神に近い人・・・と言われたそうです。ミルクホールのクラシックコンサートを初めて一年が経ちました。先日クリスマスコンサートには、ソプラノあり、ピアノ、ヴァイオリン、チェロ、フルート、ヴィオラと、クリスマスのコンサートで忙しい時期に合計10人の若い演奏家たちが駆け付け盛大なコンサートとなりました。普段、あまりクラシックには縁がない私達も神に近い音色に聞き惚れます。今年も、ミルクホールでは毎月ヴァイオリンを中心にライブを行います。平常通りの営業でのライブですのでお食事やお酒などを召し上がりながらお気軽にお楽しみ下さい。

今月のライブ 1月14日Sun. pm5:00~  
ヴァイオリン&チェロ(ピアノ)3重奏

ANTIQUÉ

ミルクホールの入り口横に小さなドアがあるのを御存じでしょうか？その小さなドアの奥には、小さい頃の思い出の様に懐かしい素敵な世界があります。古い柱時計や、アクセサリー、古めかしい箆笥、懐かしいものなら何でも揃ってしまいます。どうぞ一度覗いてみてください。

ミルクホールタイムスをご愛読頂き有り難うございます。しばらく休刊させて頂きました事を深くお詫び致します。また、定期購読をご希望の方には毎月郵送致しておりますので、ご希望の方は62円切手12枚または、744円を添えてお申し込み下さい。



他人おそろし 闇夜はこわい  
親と月夜はいつもよい

## COLUMN

一日が終わり、やがてあたりは闇につつまれていく。その前にあかりを灯もし、闇夜への備えが始まる。ことに晩秋のつるべ落としの夕暮れ時などは寸時のなおざりも禁物で、職人の仕事じまいも家々の夕げの支度もさらには旅宿に向かう人の足どりも、このことをうかつにしていたらたちまち闇の中に取り残され時として災難に会わぬとも限らない。こんな恐ろしい闇夜があると、子供にも大人にも実感するような暗い夜があった。

まだこんなに街が明るくなるまえには、しょっちゅう停電があった。台風の晩や、なにもない夜にでも突然ふっと明かりが消える。そのたびに家族でおお慌てに常備の懐中電灯やローソクを手探りに探し、少しの明かりでぼっと一息つく。

ローソクの明りの下のいつもの部屋はいつもより少し狭く、家族はいつもより丸く小さく部屋の真ん中にまるまっている。しばらくして明かりがつく気配がないと家のひと達は玄関から表の様子を見に出てみる。と、やはり同じ様にして近所のひと達も玄関先から思い思いに顔などをのぞかせている。『やっぱり、御宅もですか？停電ですな。』と自分の家だけの故障ではないことを確認する。

部屋に戻るとやはり特になにもすることがなく、もう一度部屋の真ん中にまるくなる。なぜかみな声も低くなり、ひそひそと話している。退屈になったことも達はくつくつ笑いを噛み殺しながら、ローソクの明かりにゆらゆら揺れるみな顔を見渡したり、白く長くたれさがり始めた蠟を突いたりしている。炎に手をかざしてみたり、壁に映る自分の影に驚いたりしている内にいつのまにか寝かされていた。

朝、母が雨戸を開けた隙間からの朝の光りがまぶしくて目が覚めた。